



# 公文書を考える

関西学院大学法学部・大学院法学研究科 教授 金崎 健太郎

行政に携わる者にとって公文書はとても身近な存在であるが、近年、南スーダンに派遣されていた自衛隊による日報の問題、森友学園や加計学園の問題などをきっかけに公文書の存在や管理のあり方が注目されることとなった。2011年から施行された公文書管理法では公文書は「健全な民主主義の根幹を支える国民共有の知的資源」とされ、現在と将来の国民への説明責任を果たすべきことが明記されているが、忙しい日常業務の中で何をどこまで残すのか、悩ましいことも多いのが事実であろう。公文書に関する議論の高まりをきっかけに、自分の業務に関係する公文書のあり方について改めて考えてみることは有意義だと思われる。

最初に紹介する『公文書問題—日本の「闇」の核心』〈集英社新書〉（瀬畑源／著、集英社、799円）は、公文書管理制度や情報公開制度の



『公文書問題—日本の「闇」の核心』 瀬畑源／著 集英社

か、公文書を残すことの意味は何なのか。外交文書などの具体的な例をもとに「作成する

必要性や意義をはじめ、公文書の重要性とそれが抱える課題について学ぶために適した本である。今では当然のように存在する情報公開制度がなぜ必要なのか、公文書を残さないことでどんな利益が損なわれるの

こと」、「公開すること」の意義を明らかにする。2013年に成立した特定秘密保護法に基づき情報公開の対象外とされる特定秘密の運用上の問題や現在計画されている国立公文書館の新館建設問題、最近の公文書管理制度の改革についての議論など最新の情報も盛り込まれており、公文書のあり方について改めて認識を深めるのにおすすめである。

次に紹介する『英国公文書の世界史—一次資料の宝石箱』〈中公新書ラクレ〉（小林恭子／著、中央公論新社、950円）は、英国の国立公文書館に保管される様々な文書を紹介し、その文書に関わる歴史を解説した本である。英国に留学した夏目漱石の住んでいた下宿の記録や広島・長崎での原爆投下直後に英国から派遣された調査団の報告書など、日本に



『英国公文書の世界史—一次資料の宝石箱』 小林恭子／著 中央公論新社

関係する文書も紹介されている。また、英国で最も古い公文書である「ドゥームズデイ・ブック」と呼ばれる土地台帳や、13世紀に貴族が王の権限を制限した「マグナ・カルタ」、シェイクスピアの自筆の遺言書など、歴史の教科書にも登場する有名な文書をもとに、その背景や歴史的な経緯が物語のように解説されている。現在の日本の公文書をめぐる議論とは離れて、貴重な公文書が誘う歴史の旅を体験させてくれる、ロマンに溢れた本である。